養老八詠集　巻上

中村俊定文庫
文庫 18
418
1

（皇紀甲申三月）
明和元年カ　森斤撰

寛延三年

小序

昔光窓のあるゝ風雅子寅なる
父八子のゝあに樂ゝまるを又のゝあに
あつふなをきゝをあるゝ行るされい
雪中庵を年古後世尊ゝやゝう
志ゝゝさやゝゝ行るゝ所ゝゝ
庚午のゝゝ春ゝゝ物語を望ゝ
郊外よ遊ひあるゝ温泉有ゝ

あまたのまれびとと指揮せるを答へて
行のかりあるを絶をもとめて孤魚と
なりぬるもおかしとてあるべし一集を
おもひたちぬるかと日ごろの深志
あまたとよりてまづ序をなせと
乞ひてて筆を投ずいそのる
落柿舎先生口授あるにまかせ五来よ
なりそへて伝授を志ふのを
仲桂て志義男より八ゝ仲を思ふ

志ふまたまの森へ桂ある事なるべしは文政
あまり三志ふ三さんはやんまるまを
十里ほどて耳ほ目を形ふすおの
國ほ不二あれをそあるべしはまを語みが
てみいふ虚空自在ほ人夏繁の
家みを屋のおるをぬるを行を巻され
をなりあるれ業ハ八業ほるるれをひたん
くふ京を海おるべ一ほ紫をを

たくさん中之島唄の豊饒を告れと
事三事四乃陸さくさくて現出す
通ひ通ふの唱の宿響の部分して
るうしまんを改を歩自みみたくせは
友まち新乃ひさとういつつ大井川の
水ちるさと新てハ流くの高くあきはを
部ちるのこと毎ひとを花色のやひや
なれいやさとうきかり緒ちく巻てを

清ちる家莫を訳す四季のとれかをを
かさねて風京ちかくせきまハそれを
書くとれを駅ちく永よおの集乃
渋紙ちん穴うこと

七竈庵周竹述

養老八詠歌仙目録

冨峯夏雪　養老窟　社中

高州月代　吐月窓　社中

大井夜雨　宗長庵　社中

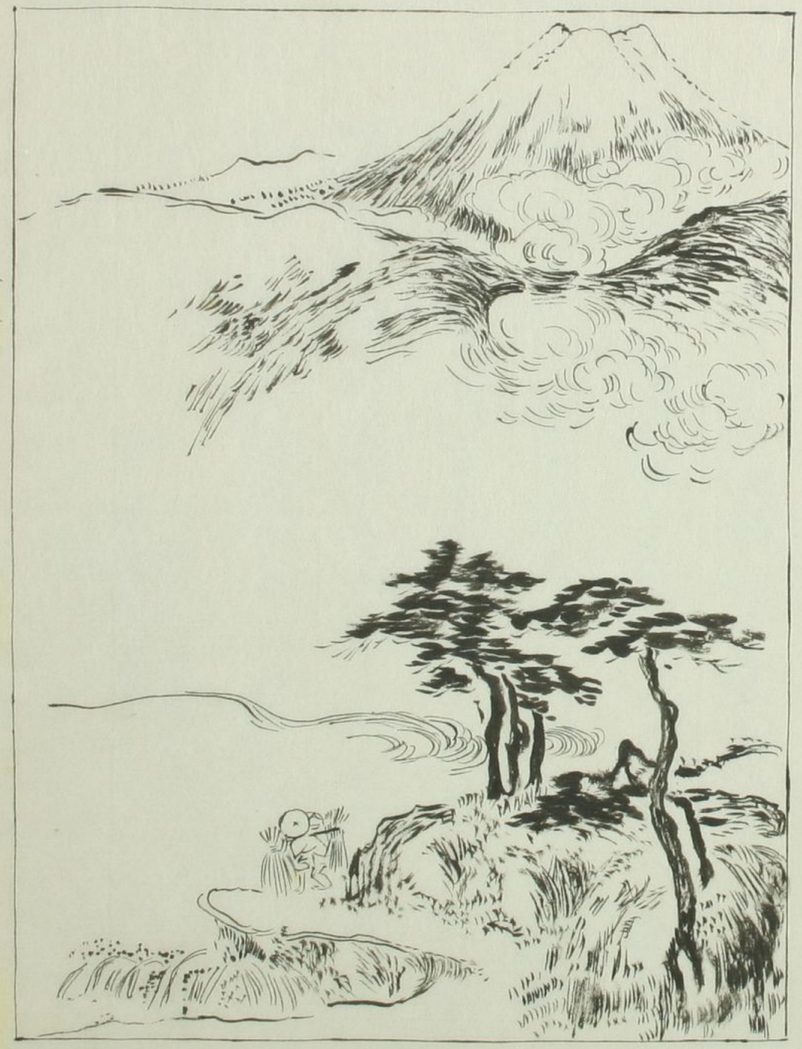
東海過客　時雨窓　社中

東西田唄　七竈庵　社中

青島宿鷺　六花庵　社中

帽山花鳥　蔦山下　社中

白岩松樹　雪中庵　社中



中村保定文庫

駿陽諸所連中

蓼太

志ゐくとあれ扇やネこ杉ろ〜　麻介

鯛見あ〜る田ろ乃ろ〜毋　竹奴

ちゝ〜ろ神もろ〜しけおれて　亀等

水ハあ〜ろと刈めろ〜　扇賀

鶯窮と松ふて月の丸ろら　道桂

作ろ〜ろ萩のろ〜

志ろ〜ゆ〜ふ理ろ乃ゆゐの麻ねをり　燕波

中ハろ〜れをろゐ教め〜　奴

あ〜ひ粉の河もなろとあておすり　介

荷丸の里ゑ〜き荷てゆゐる　賀

松ろ〜へ諏訪の〜り森妓の前れ口　桂

ち〜ろ〜ゆ俵ろ〜れ麦飯せ乃　波

味淋酒ゆ〜ふ〜ゆ〜ふ鶯ろ〜月を見て　等

ゆ〜ゆ〜り放す地れ夕風　介

軍兵の芋くるも迷ふも秋の梶　奴
時うり　古文のひきゑうりなる　桂
小ぶねの芋ぐらひのくきなる　波
氣下萠る山ゑ　ほゝゑむ　等
花もの白ひは燈も嗅てゆく　賀
大ゐ人てかるゝ走つまる　奴
傾蕎丸あらかんを望おれ　桂
まるゝ涉書あり乃昊ゑ　仆

梯うりの芋くるやと占をふる　等
風ゝ佛　諫の柳ゑまゝ　波
屋ゐんをとあるゐの樽蕎麦　奴
京尺ゝを少る京ゑ　賀
ゝ鈍ゝゝ製の菓子を嘗　波
面うけぬ日八四世　等
松ゑ月ゝゝ下る丸形嵐　仆
果をけ見ゑ陽羽の麓のと　奴

月秋の弾ち捨て伏まろび　等

いつもの通り腐れ目居し　桂

双六手習秋の傳ふさしし度し　賀

ちくと浮世のふの所表　介

年々に花の月弾乃結ぶみ　桂

ふ雲り伏るる文藻の毒　波

南総野毛連中

名月やさくらのなごり稲ひかり　蓼太

[illegible]　麻介

[illegible]　吐月

[illegible]　六渡

[illegible]　蓼下

[illegible]　蓼阿

[illegible]　春宇

[illegible]　呂風

[illegible]　雪和

[illegible]　不醉

[illegible]　吏英

[illegible]　龜鏡

[illegible]　都友

[illegible]　岷水

掃部頭たる君　南壽

世入れ乃夢を覚しし　下

さまざまの花よりしの六月　阿

四季のうつろと流めされい　月

四方の府陸奥の陸奥帯　渡

雨七日傘手紋日時刻　和

紙の紙行て紙の紙なる　鏡

裸自慢の紙世おれ　字

石拓火の浮世うつ紙をめし　醉

名山ふき社小判百枚　壽

仏をく木の葉隠れ社家ひろ　風

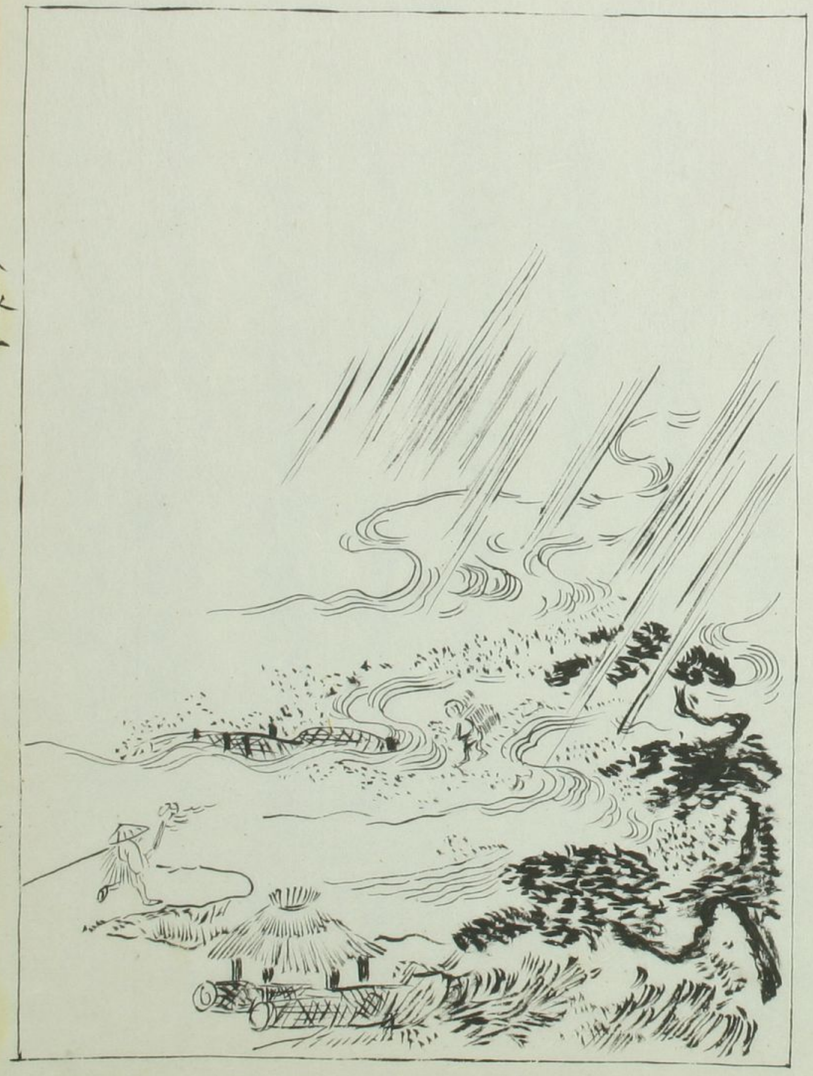
常治の神手風ふる　英

泡連枝すく既爽の侍多す　水

秋をおをえ石のうつ紙さ　友

形くハ月をもみ格を寄　下

三井城物寄り安くのたれく　境



足て雲こゑる雲つ山川七つ　和
墨絵ふまた山も淡く　阿
夕虹手百達うつ人を次　英
彩うつるまて竹まつて　渡
渡河詩のたちもとれ　吏仙
星後くも友接筆　吋　筆

駿陽島田連中

夢太

秋〳〵や地ゐも川瀬のむら紅葉　麻竹

つまもちあるる多の松風　大耳

番ひ〳〵川はぬ清水手をして　茶来

屋ん〳〵たゝ海ゐまてとゝもせと

夏ハすゝ屋をあ月の松　千布

赤〳〵ん石の芝居なり　桃舟

はる〳〵と河原明ゐ弼の森　雪斧

遊山の舟もゆ〳〵とそてゝ　紫馬

そゝ風を砂ゐ寺もあ人風水あゝ　樂浦

新地ひ〳〵きも辻ゐ花ゝ　雪菜

見る恋ゝ家ハ御ゐ所あゝ　羅除

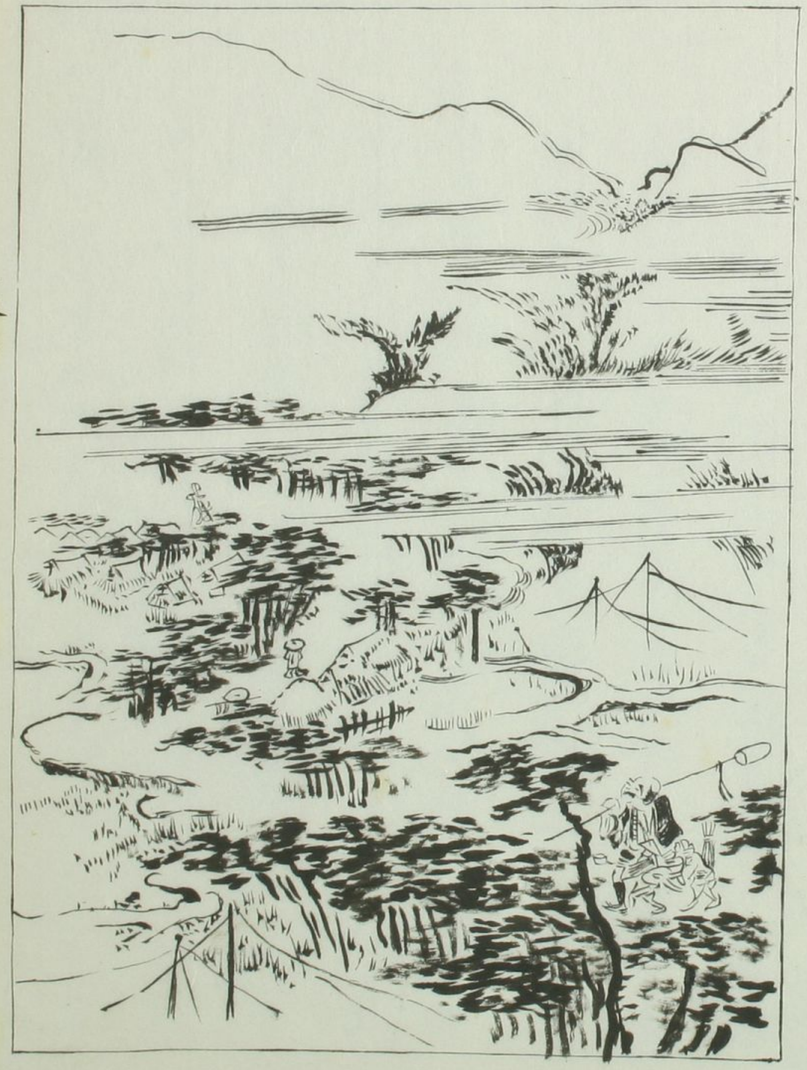
付ゐゝと二人并ゐ中ハ　素郎

朝夕の光をやゝ市御の月　来

知ゐるゐ貸ゐ金ゐ下冷　耳

又四十八ゟ乃ゟの注男　舟
酒盃藤ゟ千重ゟ物ゟ布
市木賊の枝ふくれ花咲て　馬
夏ゟ月ゟ日ゟ年　芳
出代の為吉てゟ年限ハ　菜
ゟを抱てゟ来る恨ハ百　浦
物あゟしも泣ゟの女人堂　郎
涙むゟよハ拐一年　俊

馬盃ゟ千重ゟ方眼ハ絵て　耳
献千梅さくゟ心振舞　来
宿人の顔のいやゟも薛荔彼　布
投ゟ鉗ゟの竿ゟ石答　る
羽二重を何ゟ日ハ義ゟ隠　芳
淺物ゟ千月もやゟ　俊
象のつふやき和ゟ扶の古さ　浦
扇瓶ゟ和せゟ元ゟ蝉　舟



茶菓子古く勅て只あけ飯　郎
迎乃舟を水ゆく月し　耳
六七抱蔓菜の土も丈ふう　馬
ふるを衣をぬいて皆(ホイシン)身　帝
撰集れ部立も花の弾丸ゑ　菜
寒厨きれ〳〵中の三月　捕

駿府連中

唄ふる旅人の夢の色　夢太

うつろふ秋も日和哉　麻介

小さうす雛の泉水抄て　盤古

古刀掛の急度あるを見　馬老

銘

鈴むし書て深き夜の目　莱詹

そよ荒て文杉を弾更　阿振

齊宮の嘉言をもいとはぬ　盈行

ぬ月の際つ恋賣る夜　都雁

弼笠の冬ふるふる蘿刀　葛木

東京乃事を毎日吟聴　兎夕

一味まゝ木綿貧茶こゝ　兀子

火事子寄れ新茶ちゝ　榮府

二枝三枝四枝夜の菓撫　耳得

撫の手ぶ面目もなし　古

社祈て咲たをゝゝ出開帳　光
庵家も加る宮を志ゝ　行
仰向て只月を見る人の　振
ゝゝ天満宮の御神やゝらん　麿
ゝゝ雲の蓑笠の蓑の蓑ゝ　雁
なるゝゝてひぬる武田上杉　卜
薗丸の白手垣を結ゝて　夕
ゝゝ帰る祖師の清ゝ　子

加ゝゝゝゝ八地獄も法華　府
無念なゝおれも一信　得
加賀を本枕唐土朱ゝ　古
切燈町手風ゝゝゝ　光
聲絵ゝゝの荒増ゝ毛　麿
ゝいゝゝ春ゝ堂路立人　振
汲ゝも折ゝ自北中姫ゝ　行
除ゝゝゝ亭の初沙　雁

冨士も又像家の拵あるき　末
一所不住の是を一池　夕
遥うけて為せる禍仕の二方に　子
堤へうゑ家を出たつ　府
苗代を毒もかゝ飛て世の宝　得
上るゝを雲雀囀る　執筆

熟中吟

東都天府

刈しゝて高の果あり杉村の
青柳や岸もうかゝ八潮見
百卿をひとり指形蔵うに
糸うけうゝ人よ赤色の孫うひ
飯汁や一膳使の色牡丹
いつしゝよ春蕓の里や角力丸
苗代やかゝしも去八伊勢糸
川青ゝ沖ゝおゝ孫ゝ家ゝ

楚水　物雲　吏流　孔峯　桃境　鬼守　是物

三日月や杉の梢に鳴ひたり　友鴉
きらぬぬく黄車乃糸哉　白翅
下戸へ来る麻の風や深の月　花明
雪ぬるや栗ぬ〳〵ぬる屋もあり　鼠腹

、

識て見る蔵の書何疑ふのあり　南竹
小原女や紫をかけてあはきあり　菜路
山寺や二筋三筋一丁大根　春ひろ
夕暮小柳ふるかやふの秋　柱什

蕎麦続よまきたる牡丹哉　抵傘
下雪やそれ嵯峨ちれ掛り毋　以六
芭蕉ふんと作るてもの芥子畠　市柳
立寄てすみて菊ふ寄子ぬ　新鍋
根ものひとの陣ぬ故怨哉　雪汀
抱籠ぬ花生〳〵多ぬ秋　月砂
庵もよく掃て紙之京ぬ月　蓼太
似〳〵ものを集て一把菫哉　盤古

釈

釈光陰

夏座もすくなくぬる薄うす　嵐亭
賣家より一日くやき砂糖　完車
曲水やくふかんの車　女海
うぐひすの時くるまつ桃さくら　井魚
大仏の伏見北里や秋の雲　三楚
義仁や見ても魚村の貸小袖　睡亟
世子や桔梗ぬる蓼ぬる世　人左
捕狸間今川の古墳
香よ世よ蓼ぬる文武の二つぬる　南竹

時々ぬる月ぬる酔ぬる酒　節庵
柳の香も及ばぬ汁や豆汁　八窓
長閑さや衛ぬる畑の仮ぬる　和星
柳の香や蓑も破れぬる　溪里
すり屑の飛や巻の玉使ひ　榮羽
搗ぬる日の御庭よ仏武　柳波
御堂よ広むぬる世ぬる　白牛
蓮波の花さよ弟袋不ぬる
接ぬの打ぬる和ぬや玉　蓼太

後の月時雨やうな露の風　沾我
暮てまた茄子喰る月哉　如風
笠あけて淀見や紙の月　類柯
赤坂下を暗さうな蓮葉哉　前路
蓮葉のいきもや蓮て花の雨　雨磧
ひとまぶし赤瓦山の月哉　何望
方ひとの傘を帰りて時雨哉　丹砂
朱洗ふ人よ訓てやこそさうみ　大路
十八の蕊や見ひらかみ　百示

萩を兼て野るも秋の海の風　湖光
能因は時分はよしと一葉哉　雁奴
名月やよりと紙のさびさうめ　素丸

、

山ちやもものいふく動化帳　駿府　耳得
葛打も者よ林中哉　盈行
言砂を掃上りて千曳哉　蓼磨
水筋の夕蓮い川暮れ哉　玉雄
蒲倉の物瓶よ咲や苦桔花　あ振

蓬〻〻学ぶる枝あり高き石　蓼
弥せぬ蕾ちて枯れ乱れ　女扇離
義入の伝て郊の形式　蓼珠

、

萩ハすゝき袂も乱れ衣更　同鐘山
北篠や故王の秋も幸ふ沢　金鳧
鶯鳴や寒を分る咲もせず　子来
笑ひ獨り笑ひて咲ひ乱れ　居逸
接ての涙をゝゝ氷室哉　周露

りゝや芦も指さすまでもて　琴馬
一枝銀夢丸胡蝶待まりり　奇峯
人の家の結び目ある柳哉　六貫
森〻〻紙船紙山や伊勢人　之仲
紙〻〻れ乃行〈瓊〻〻乃〻　渭水
鄙唄のまゝ〻〻嗅き茶摘哉　遠江燕波
桟の動ゝ動定や松乃月　同麻竹

、

胡蝶ゝ村所羽毛左右　駿府瓦子

楠よ来てくらかくや緑ふかい　馬先
五月雨や新ハひとつの十二階　都雁
さんくくもたくる如き一枝能　竹工
くもゝの次ニよ昔々鶯ニ　紫府
生代や都よ係ぬ雲すくく　菖士
但祭ニ云や寄うくかくもたる梅　雅堂
寄能やまくる蔦ぬ多ぬ新　兎夕
如くニ後よ朝日かくへく牡丹ニ　鶯三
水茎ハ稚よ紫ハ蔵ニ帝　薫松

百ニハ塚よ降ニて成りくう　桃源
又糸くくよ生ぬ世ふ猫牛ニ　女露菊
角くぬ車くくめて花野ニ　亀童
蕎笠よ夕暮ぬ山ぬ栗山よ　呉牛
等月よ新地せてくく牛　之東
くくも麻ケ亭の
つ田よ友をくまんく
牛馬ハ知ぬ多涼　蓼太
地走ハ風も望ハて青田ニ　蓼旦
青くくや四よ月ハ百ニつ　盤古

むつとして炭を庭下
柳ぶとあるは師のさとを
時ひ枯らく

習ひしよりの八柳のんむ　麻斤
仆まうに沢よ横ふ清水む　左
京をき聖をふつやめ　女扇賀
寄井月や引ふ波の撰花　燕波

、

神風や梅もあらねば詠歌祥　駿府左逸
下萌も白きものしおさんら　初暦

至下盛やの牡丹　蘭陵
ひとたきり梅よ寄井波ふら　貞之
恋をしく夢ふ八月ふ移蛍　只言
海ふるひとの月井寄ねむ　自考

、

初汐ふ東心ふも弓を流ふ　久紙蓼舟
耀州の茶ふ　桃の花　茶話坊
枯果て川幅尺せる柳ふ　里仙
月ひとり明ら出して雲雀む　其帆

、

葛ハ又寄千本の桜うゑ　島田　大耳

もりの秋やうつるしまの豆腐賣　幾馬

人のを織ゐて音々ゝ晒川　千布

三月の一梯入て事西うゑ　樂輔

香よ白ふ花ハ何〳〵五月雨　素郎

行遠ふ機も尺〳〵ゝ雪　女　雪葉

ちら〳〵ゝ音り事や陸の花　茶来

傘さけぬ松ふつゝふさよ筋ゝ茶　桃舟

仮堀の木履ゝ歳〳〵ゝ　山這

多鶯哥里ハ鮒のさゝうゑ　茶莚

水青を京ゝ持ゝゝ〳〵ゝ　馬蓼

昼ふき月の事や小夜時雨　梧白

耶〳〵ゝ赤稲花ゝ鶯ゝ　雪芳

白芥ゝ敷ゝハ重てふゝゝ　羅除

、

むゝ百北ゝゝ〳〵ゝ蝸牛　江風　求己

目北ゝ〳〵ゝの八何〳〵ゝ　杜兮

ひとへぬく作も従ふ友　衣　雪臼

、

投入る尺度は初ふる柳哉　富士根方　波光

玉もまる笑七色のまゝうる　湖青

、

築山をあらて家うし茨の色　大賦

海松ふるや吸物挽の汐うら　千潮

うはふりて笑ふ色あり扶一夏　五秋

驚れる居もたゝん猫の恋　花猊

都もあるちゆ来て驚る　塘仙

百の日ひとり雪掃うる　苗目　氷壺

卯花色の雪ふる鳥哉　閑方　長樓

百時て又初雪やおろも人　城腰　昔我

、

嘗ふるまきる世や海り雪　由井　無説

まる世の中うる春し庚かし　柳市

名月や四井よ松ふ雪一木　打水

流れ　諸所　麻介
月新や水の底まで松の影　釈　素羅
折もて柳をめぐる流れ　道桂
一束の金色尺きそうそはの花　女　扇賀
そらいろ　玉手山柳
みべしらの師匠の使ひ
蛍ぬきの青うち行ぬ時雨　女　雪菜
俎子の中まで玉あり自の秋　琴松
雲ケ谷や蒙も綿のは使る　亀等

芦田路の人ふけく蓮千年忌　細島　竹奴
新古の後屋水まで流れ　大舟
今朝見ふて青葉の影　少年　筍童
青く八柳子花のあるあれ　流耳
簑蛾能ふ蛍あり田舟　茂林
世界拾て見ても奥あり蓮花　蕉波

春ふ浮世拾ケ月雲庵　茨枝　偽水
雲拾ふ月うち裏雲一株の影　洛川

さゝれ石や巡て八百万年の松　卅二
けく〻紫や秋の海も一紫より　竹使
古家や年の数ふる桃の花　蕪使
吹とく風ゆゑあり春の篠　麻介

、

志〻雪のむ苔墨や木弾き　杉山　古江
白桃やひとゝきあるる雲の中　奥津　白鷺
蜻蛉やふる百年笠のある時　大宮　曙山
沈黙して尼ゐられる紫陽花　梅冨

、

一林うき世のあや雛の苔　京都　山只
秋〻川や雪ゆ猩々の裳より　花沙
志〻鹿や琴よそあるる風ふる　歩月
日暮の下ゝ思ふ牡丹の風　簾文
散む蔭ゝ風の虎ゝ蝶　子鳳
佐多の猪夢をふふや京のひま　可因
神垣の目を美〻ゝ柳風　文下

行西ゝ

何あてなしやいそ〳〵稲の花　尾諸九

時雨れ〳〵のきや鞠子の心　女琴之

くれ竹の垣や嵐の後の石　江機

寒〻ちらぬ下枯れ入る梅の花　蝶夢